

日本医真菌学会
名誉会員

椿 啓介先生

(1924-2005)



訃 報

本学会名誉会員椿 啓介先生は、
平成17年8月18日に逝去されました。
謹んで弔意を表します。

日本医真菌学会

理事長 小 川 秀 興

椿 啓介先生のご逝去を悼む

日本食品分析センター多摩研究所

宇田川 俊 一

本学会名誉会員椿 啓介先生は平成14年に脳梗塞で倒れ御加療の後、御回復著しく、ごく最近まで御自宅で菌類に関する随想の執筆など御仕事にも復帰されておられましたが、平成17年8月18日、敗血症のため突然御逝去なされました。もはや長年にわたる豊富な御研究に基づく御指導を頂くことが適わなくなり残念の極みです。

先生は昭和23年に財団法人長尾研究所に入所し、主任研究員を兼務されておりました小林義雄先生に師事され、新しい分類体系が出現しつつあった不完全菌類の研究に着手されました。長尾研究所はオランダの Centraalbureau voor Schimmelcultures の施設に感銘を受けた長尾欽弥氏が昭和15年に設立した有用菌類の研究と菌株の保存を目的とした民間の研究機関でした。不完全菌類の分類学的研究は、折から Saccardo 体系の見直しという変革期を迎え、昭和28(1953)年にはカナダの Hughes 博士によって分生子形成様式という新基準が示されました。この考えは当時先端研究として国際的に高い評価を受け、椿先生(1958)、インドの Subramanian 教授(1962)、カナダの Barron 教授(1968)らによって更なる検討が加えられ、Hughes-Subramanian-Tubaki の不完全菌類分類体系として確立されました。先生はまた新分類基準による分生子型が子嚢菌類の無性世代にも対応できるかを調べ、完全世代-不完全世代の相互関係について考証し、系統分類を不完全菌類にも反映させることを目指されました。

昭和36年、長尾研究所の閉鎖を待たず財団法人発酵研究所に移られた後も、ライフワークとしてこの研究を続けられ、昭和38年に集大成を発表されました。詳細は、昭和45年の第14回日本医真菌学会総会において特

別講演「不完全菌類における諸問題」、昭和51年の第20回総会のシンポジウム「菌類の生活史と不完全世代の位置づけ」として講演され、総説「真菌の分類、特に有性・無性世代の関係」として真菌誌18巻263頁(1977)に掲載されております。国際的にも、「The Fungi. Vol. III」, 「Taxonomy of Fungi Imperfecti」への分担執筆、1981年の自著「Hyphomycetes—Their Perfect-Imperfect Connexions」の刊行、1969年の第1回国際不完全菌会議(カナダ)への参加発表と御活躍になり、授賞対象として平成5年の南方熊楠賞受賞に輝きました。その後、発酵研究所から筑波大学にかけて先生の御研究は地球環境のさまざまな生態的地位を占める菌類に及び、落葉菌、葉面菌、植物寄生菌、菌生菌、海生菌、水生不完全菌などについての知見を深め、後継者を育成されました。

先生は接合菌、酵母状菌にも御造詣が深く、長尾研究所時代には曾根田正己博士と共同で、日本産 *Prototheca* の研究を行い、新種を報告されました。後年、人や動物のプロトテカ症が報告されるに及び、総説「プロトテカという微生物」を真菌誌29巻155頁(1988)に寄稿されておられます。また、昭和35年に大原一枝先生が御報告されましたムーコル症原因菌を *Absidia ramosa* と同定されたのを初め、種々の臨床分離菌の同定に貢献なされました。

昭和58年に東京で開催された第3回国際菌学会議では総務幹事長を務められ、先生の温厚で誠実な御人柄に多くの海外の菌学者が魅せられました。御生前の学会の発展に対する多大の御功績を称え、心よりの御冥福を御祈り申し上げます。

故 椿 啓介教授の略歴

大正13年6月21日	東京都にて出生
昭和23年3月	東京農業大学農学部農芸化学科卒業
昭和23年4月	財団法人長尾研究所入所、後に主任研究員
昭和34年8月	広島大学理学博士
昭和36年6月	財団法人発酵研究所入所、後に副所長
昭和51年4月	筑波大学生物科学系教授
昭和60年4月	日本菌学会会長
昭和60年9月	日本医真菌学会監事
昭和63年4月	日本大学薬学部教授、東京農業大学客員教授
平成5年4月	第3回南方熊楠賞(自然科学の部)受賞
平成9年9月	日本医真菌学会名誉会員
平成17年8月18日	逝去